The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 余情 |
| Author(s) | 澤潟, 久孝 |
| Citation | 懐徳. 1940, 18, p. 38-49 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/89045 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 餘情

澤瀉久孝

家のひさし、きものの袖、蒸菓子の栗きんとん、さうした一例を見てもわかるやうに、餘情が日本の衣食住の生命である。茶は支那から輸入されたものであるに拘らず、日本の氣候と土地と水と、日本人の味覺とが、支那にはない玉露製の茶をつくりあげた。世界の飲料中で、玉露のもつ餘情に及ぶものはないであらう。かうした生活の上に生れた藝術がまた餘情をその生命とする事は當然であらう。その事は、Shelley の雲雀の詩と、家持の萬葉卷十九の雲雀の短歌とを比較するだけでも明かであらう。幽玄の世界は新古今にはじめて生れたものではない。餘情とは、それを意圖した構成の上にはじめて求められるものではなしに、寫生に徹した表現の中にもおのづからにしてこめられる風姿である。萬葉の作品の一語の中にこもる餘情も、われ〳〵は不用意に看過してはならないと思ふ。わたくしはここに「なくに」といふ言葉と「ずは」といふ言葉とをとりあげて、「に」といふ言葉と、「は」といふ言葉との持つ餘情について私按を述べてみたいと思ふ。

(1)　山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道之白鳴（巻二、一五八）

(2) 石戸破る手力もがもた弱き女にしあれば爲便乃不知昔（卷三、四一九）

(3) 戀死なば戀も死ねとや玉梓の道行人に事告無（卷十一、二三七〇）

などの語句の「なく」を口譯する場合に、「ないことよ」として大體あたつてゐる事は、

(4) 大海の磯もとゆすり立つ波のよらむと思へる濱之淨奚久（卷七、一二三九）

(5) 大海の水底とよみ立つ浪のよらむと思へる磯之清左（卷七、一二〇一）

の二首との比較によつても認められよう。そこで、

(6) 志賀の海人は海藻苅り鹽燒き暇無み櫛笥の小櫛取りもみなくに（卷三、二七八）

の「なくに」について、口譯萬葉集に「櫛さへ取り上げても見ない事だ」と譯し、井上氏新考に「ミナクニはミヌニの延言なれど今ミヌニといふとは異にてミヌヨなどいふに近し」と述べ、全釋に「手にありても見ぬよの意。かうしたナクニがいくらもある」とし、總釋に「手に取つても見ないことだ」とあり、講義に「見るたまもなくてあることよとなり」と釋かれてゐる。卽ち現代の諸家多く「なくに」を(1)(2)(3)などの「なく」とほゞ同樣に扱つて居られるのである。然しそれでよいであらうか。

(7) 神風の伊勢の國にもあらましを何しか來けむ君毛不有國（卷二、一六三）

(8) 苦しくも降り來る雨は三輪が崎佐野の渡りに家裳不有國（卷三、二六五）

(9) み笠山川野べゆく道はこきだくも繁く荒れたるかも久爾有勿國（卷二、二三二）

(10) あけぬべく千鳥しば鳴く白たへの君が手枕未厭君（巻十二、二八〇七）

(11) 妹が見し樗の花は散りぬべしわが泣く涙伊摩陀飛那久爾（巻五、七九八）

などの「なくに」はいづれも「ないのに」「ないものを」などと譯されたに異論はないであらう。しかもこれらの「なくに」は一首の歌意として「ないのに、それだのに、それであるに拘はらず」の餘意がかなりはつきり感じられるものである。これに反して

(12) 吾が大君ものな思ほし皇神のつぎてたまへる吾莫勿國（巻一、七七）

(13) 大國の眞神の原に降る雪はいたくな降りそ家母不有國（巻八、一六三六）

(14) 吾が舟の梶はな引きそ大和より戀ひ來し心未飽九二（巻七、一二三一）

(15) 渡守舟早渡せ一年に再び通ふ君爾有勿久爾（巻十、二〇七七）

(16) かくしつゝ吾待つしるしあらぬかも世の人皆の常不在國（巻十一、二五八五）

などの「なくに」は「ないものを、だから、それゆゑに」の餘意が感じられるものである。然し、これは「なくに」の語が直ちに「それゆゑに」となるのでなく、「物な思ほし」「舟早渡せ」の希望によつて、さうした餘意が感じられるのであつて、「なくに」を「ないがゆゑに」と譯する事の妥當を缺く事は、「いまだ飽かなくに」と「いまだ飽かざれば」との相違を考へる事によつて明かとなるであらう。「ざれば」には論理があるだけである。「なくに」には嘆きがある。從つて結果に於いて、(7)—

(11)の如き所謂逆接的の餘意と(12)—(16)の如き所謂順接的の餘意とにわかれる事になるのであるが、さうした餘意のはつきりわけられないものがある。

(17) 鴨鳥の遊ぶこの池に木葉落ちて浮きたる心吾不念國（卷四、七一一）

(18) 霧立つ春日の里の梅の花花に向はむと吾念奈久爾（卷八、一四三八）

(19) さにつらふ色には出でず少くも心の中に吾念名君（卷十一、二五二三）

(20) すが島の夏身の浦によする浪間も置きて吾不念君（卷十一、二七二七）

(21) うち日さす宮にはあれど鴨頭草の移ろふ心吾思名國（卷十二、三〇五八）

(22) 筑波嶺の岩もとどろに落つる水よにもたゆらに和我想毛波奈久爾（卷十四、三三九二）

(23) 唐衣裾のうちがへあはねどもけしき心を安我毛波奈久爾（卷十四、三四八二）

(24) 谷せばみ峯にはひたる玉かづら絶えむの心和我母波奈久爾（卷十四、三五〇七）

(25) 安積山かげさへ見ゆる山の井の淺き心を吾念莫國（卷十六、三八〇七）

(26) 佐保河にこほりわたれど薄氷の薄き心を和我於毛波奈久爾（卷廿、四四七八）

などの「思はなくに」になると、さうした口譯ではおちつかないものがあるやうに感じられて來る。そこで右の(6)の場合と同樣な譯が、これらの作に對しても現代の諸家によつてなされる事になるのである。然しさうした解釋をする事は、原作をほんとに正しく譯する態度と云へないのではなからうか。

わたくしはかつて拙著新釋（下卷）において

(27)　あしがりのとひの河内に出づる湯のよにもたよらにころが云はなくに　（卷十四、三三六八）

を口譯して、「足柄の土肥の河内に湧き出る溫泉の湯のゆら〳〵とただよふやうな不安なものいひをあの人はしないのだ。それだのに――」として、その「云はなくに」を說明して、『「云はないことだ」と云ひきつてしまつては氣持が出ない。「云はないものを、それだのに自分の心は何となく安心が出來ない」と云つてしまつては說明がすぎる。そこまで云はずに戀する人の不安の氣持をたゞよはした言葉が「云はなくに」である』と述べておいた。そして右の(22)の歌を「筑波山の岩もとゞろくほどに落ちてくる水のやうに動搖する心を自分は持つてゐないのに」と口譯し、「前の歌(27)は相手を信じながらの不安であり、これは自分を信じながらの不安である。

今更に何をか思はむ打靡き心は君によりにしものを

といふのも戀する人の心であり、信じながらの不安も愛戀する人の心である。自分はこんなに思つてゐるのに相手の人は思つてくれないといふ打算的を不安とも解せられないではないが、さうした相手に對する不安と云ふより、思ひ合つてゐながら自分の心の底にある不安である。しかし作者はそこまでハツキリと云つてゐない。むしろ相手に對してとか自分に對してとか判然と云つてしまへない漠然たる「不安である」と解說しておいた。戀する心は信ずる心であると同時に、信じられぬ、心もとな

い心であり、その信ずる心と不安な心との交錯するところに戀する心があり、そこに嘆きがある。その嘆きが「なくに」の「に」にこめられてゐるのであつて、「わが思はなく」ではその嘆きが出ないと見るのである。しかもさうした解釋態度は右にあげた(17)以下(26)に至る諸例に於いても當然とらるべきものではなからうか。從つてまた

(28) 瀧の上のみ船の山に居る雲の常にあらむと和我不念久爾（卷三、二四二）

の「なくに」をかつてわたくしは「餘情をふくめた言葉として、感動の助詞で終つてゐる場合と同じやうに解してよい事もある」と解いて、「いつまでも生きられようとは思はないことだ」と口譯しておいたが、「餘情をふくめた言葉として」はよいとして、「思はないことだ」と譯したのはあやまりであつた。この御作者弓削皇子は御年若くして薨じられたやうで御病弱であらせられたのではないかと思はれるが、御自身にもその事を感じさせられた皇子が、美しい吉野の山川に對して御命のはかなさを思はれつゝお詠みになつたものだ「おもはなくに」の御嘆きとなつたもので、「思はないことだ」と云ひ切つては御嘆きの餘意が生かされない。その意味に於いて、金子元臣氏がその評釋で、この歌意を「自分がこの世に、何時までも住み果てようとは、思はれないになあ」と譯されたのは、從來の諸譯中最も原作の意に近いものと云へよう。

さてかういふ風に見來つて、再びはじめの(6)「志賀の海人は」の歌を見るに、前掲の諸家の說にあ

き足らぬものある事が感じられようと思ふ。そしてこの歌についても金子氏が「手に觸れても見ぬのになあ」と譯されてゐる事が妥當だと認められる。しかもこの事と關聯して考へられる事はこの作の作者の問題である。この歌、題詞に

石川少郎歌一首

とあり、左注に

右今案石川君子號曰二少郎子一也

とある。それについて考に、題詞の「少郎」を「郎女」と改め「今本少郎と出て左の注に石川の字そといへるは甚しきひがこと也」とし、「こは必女の歌なるを男女の哥の分ちだに見しらずや」と述べ、略解、槻の落葉、攷證、檜嬬手、古義などの舊注いづれも題詞の「少」を「女」の誤とし、攷證には「石川女郎わが身を海人をとめによせて」詠んだものとし「何ぞ思ふ下心あるべし」と述べ、檜嬬手には、「此人は遊行女婦にて、此歌よめりし頃は、筑紫國志加に在し故に、自ら然之海人（シカノアマ）といひなしつる也」と云ひ、現代に於いても金子氏は古葉略類聚抄に「少」を「女」とあるによつて改め「この石川女郎は太宰帥大伴旅人卿の母石川命婦（邑婆）の事であらう」とし、「婦人の作らしいことは衆口の一致する處である」と述べられてゐる。これらの說に對して井上通泰氏の新考には「もし人の上をよめる歌とせば女の歌とは定むべからず。又左注を見ればはやくより少郎とありしなり。輕々しく

改むべからず」とし、鴻巣氏の全解にも「石川女郎と改め筑前の人とする説は甚だしい誤である」と述べ、山田孝雄氏の講義にも「女の歌なりといふ證は一もなし。かへりて女の歌なりといふ人々の説こそ疑はしきなれ」とし、攷證の説を當らずとして、「海人の生活を客觀的に描寫せるものとしてよき歌といふべきなり」とある。これはまさに山田博士などの説の如く、たゞ現存の一本に「女」とあるのみによつて諸本の題詞を改むべきものでなく、作者を女とすべきではないのであるが、これらの諸家の如く「なくに」を譯されたのでは不十分であり、しかも金子氏が折角穩かな口譯を試みられながら、作者を女とされたのは、この語感にいまだ徹せられなかつた爲であらう。わたくしをして云はしめられば、「ないになあ」とも譯すべき餘情のある「なくに」であればこそ、これは男性の作であると思ふのである。これは單なる「客觀的」な描寫ではない。旅にあつては物皆がめづらしく感じられる。都會の電車の中の朝晩見るやうな女性であつても、それが遠い旅の空で、ふと言葉を交すやうになると何となく心のひかれる事のあるものである。都の男が旅に出て、あまさかる鄙の果で、櫛笥の小櫛取るひまもない海人の少女に心かれた、その愛憐の情が、この「なくに」の語にこもるとわたくしは思ふのである。「なくに」の餘情に、この作者が男でなければならぬとする論據があると信ずるのである。「なく」と「なくに」とたゞ一語「に」の有無の相違ではあるが、そこに餘情のこもつた詠嘆の意を汲まうとするのである。

(29) 名草山言にしありけり吾が戀ふる千重の一重も名草目名國（卷七、一二一三）
(30) いかにして忘れむものぞ吾妹子に戀はますとも所意莫苦二（卷十一、二五九七）
(31) むろがやのつるの堤のなりぬがにころはいへども伊末太年那久爾（卷十四、三五四三）
(32) 家島は名にこそありけれ海原をわが戀來つる伊毛母安良奈久爾（卷十五、三七一八）

などの「なくに」もまたかうした態度で解する事によつてそれ〴〵正しく會する事が出來ようと思ふ。

(一) かくばかり戀乍不有者高山の磐根しまきて死なましものを（卷二、八六）
(二) なか〳〵に君二不戀者枚の浦の海人ならましと玉藻刈りつゝ（卷十一、二七四三）
(三) なか〳〵に人跡不在者柔子にもならましものを玉の緒ばかり（卷十二、三〇八六）
(四) 言繁き里爾不住者今朝鳴きし鴈にたぐひていなましものを（卷八、一五一五）
(五) しるしなき物乎不念者一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし（卷三、三三八）
(六) わが思ひ如此而不有者玉にもがまことも妹が手にまかれなむ（卷四、七三四）
(七) おくれゐて那我古飛世殊波み苑生の梅の花にもならましものを（卷五、八六四）
(八) 長き夜を君に戀ひつゝ不生者咲きて散りにし花ならましを（卷十、二二八二）
(九) たちしなふ君が姿を和須禮受波世のかぎりにや戀ひ渡りなむ（卷廿、四四四一）
(十) いつまでに生かむ命ぞおほかたは戀乍不有者死ぬるまされり（卷十二、二九一三）

(十二) 秋萩の上に置きたる白露の消かもしなまし戀夢不有者（こひつつあらずば）（巻八、一六〇八）

これらの「ずは」を宣長が「んよりは」と解してよりそれに從ふ人が多かつたのであるが、熊谷直好、黒澤翁滿、物集言世などが、この「ず」はやはり打消の語で、「は」は輕く添へたものと解し、松本進吉博士それらの説をうけてこの「ず」を打消助動詞の連用形とし、『連用形の用言又は助動詞に「は」がついた場合は、たゞ「は」の意味が附け加はるだけで、連用形それ自身の意味職能は少しも變化せず、隨つて連用形をとつて居る用言又は助動詞の他の語に對する關係は「は」があつても無くても何等の相違を來さないのが常である』とし『「ずは」はどこまでも「ず」又は「ずして」の義であつて「よりは」又は「寧」といふやうな比較選擇の意味は全然無い。たゞ「寧」といふ語を添へて解釋すれば歌全體の思想に存する、一方を斥けて他を擇ぶ意趣を十分に明にして、一層適切な解釋が得られるといふまでである』と述べられ、今日通説となつたやうである。この博士の語法上の解説は誠に當を得たものと思はれるが、この「は」はたゞ輕く添へたと見るよりも相當強く詠嘆の意をもつた語として解すべきではないだらうか。「は」といふ係助詞には本來詠嘆の意が相當強くこめられたものがあつたのではないかと思はれ、現在にあつても「まあこの人は」などといふ場合の「は」は「まあこの人つたら」といふにも近く詠嘆の意がかなり強くこもつてゐるやうに思はれる。「吾妻はや」「あひし子らはも」などの「はや」「はも」の「は」と共に「ずは」の「は」を詠嘆の意としてはじめてそ

の語感が十分に汲みとれるのではなからうか。これをただ輕くそへた語として見る時には語意が十分に生かされない感がある。そこで橋本博士の云はれるやうに「むしろ」といふやうな言葉を補はないとはつきりしない氣がせられるのであるがそれを補へば結局「よりは」と同じやうになつてしまふ。然るにこの「は」に詠嘆の意があるものとして、たとへば「サ」といふやうな語を入れて「こんなに戀ひつゝあらずにサ」とか「人言のうるさい里に住まないでサ」とか「かひのない物思ひをしないでサ」といふ風に譯するならば、「むしろ」などといふ比較の意を表面に補ふ事なしに、しかもその餘意が十分に生かされるのではなからうか。それは、

雪こそは春日消ゆらめ心さへ消え失せたれや。言も通はぬ（卷九、一七八二）

あしがりの箱根の嶺ろのにこ草の花つ妻なれや。紐解かずねむ（卷十四、三三七〇）

などの「や」「か」より「や」への推移（國語國文第八卷一、二、五號（參照））の持つ餘情と極めて似たものと云へるのではないか。

(十二)　みさごゐる渚にゐる船の夕汐を將待從者吾こそまされ（卷十一、二八三一）

(十三)　賢しみと物言從者酒のみて醉泣きするしまさりたるらし（卷三、三四一）

(十四)　玉敷きて待益欲利者たけそかに來る今宵し樂しくおもほゆ（卷六、一〇一五）

(十五)　たまきはる命に向ひ戀從者君が御船の梶柄にもが（卷八、一四五五）

などの「よりは」「ゆは」といふ云ひ方があるにかかはらず、一方に「ずは」といふ云ひ方があり、しかもその方が多く用ゐられてゐるといふ事は注意してよい事ではなからうか。即ち「よりは」といふ言葉は「水は空氣よりは重い」といふ風に「比較」を示す概念的な記述に用ゐられやすい言葉であるに對して、「ずは」の方は、その上に述べられた事實を否定して、別の事實を望まうとする「事實」の上に立つた云ひ方でそこに實感があり、その下に詠嘆的な「は」の助詞がかへられてそこに餘情がこもり、かうして「ずは」といふ表現が萬葉人に愛用せられたと見られないであらうか。

即ち「なくに」の「に」、「ずは」の「は」、ただ一語のせんさくに終始したやうであるがかう見る事によつて、こゝにも萬葉の作品のもつ「餘情」の世界を明かにする事が出來るのではなからうか。

（昭和十五年八月九日稿了）

# 詞藻

## 樓居賦 幷序

黃裳　中井天生

昭和己卯之春。寄進懷德堂水哉館遺書於浪華重建書堂。歸而廬于左京大堰坊。聽事牓水哉館粉隸。樓上有華胥國門橫扁。壁間揭華胥國天樂樓兩面二記。四方展開。隣樹修樾。東北望比叡山如意嶽。